

Z会進学教室 葛西通信 2月号

葛西教室に通う本科生の皆さんは、以下の四点を心がけるようにしましょう。

- 1 進学塾に通う中学生としての自覚を持つこと。
- 2 信頼の土台となるあいさつをきちんとすること。
- 3 書くことを大切にし、ノートをしっかりとること。
- 4 自習室を上手に利用し、自分で考えてもわからないことは遠慮なく先生に質問すること。

葛西教室より

葛西教室の先生の声をお伝えします。

「えにし」

教務スタッフ 荒井成人

X年前の1月18日。僕は自分の部屋で朝刊を布団の上に広げ、メモの書いてある問題用紙を見つめていた。そしてため息をつく。しかし溢れてきたのは息だけではなかった。目が滲んでいるのが分かる。本当に怖い時には声が出ないとよく聞かすが、あの感覚はこういうものなのかもしれない。絞り出した言葉は、結局ため息の中に埋もれてしまった。

僕のセンター試験は悲惨なものだった。志望している国立大学の必要科目数が少なかったため教科にして4教科しか受けていないが、得点の割合はここには書けないほど。もう廃線になってしまったが、日本屈指の急勾配を誇った信越本線の横川～軽井沢間。69.7%という勾配を力強く上り下りしていた電気機関車、あれがとても好きだった。そしてこんなところで「ロクサン」と肩を並べてしまった。第一段階選抜がない学部だったので二次試験の受験は可能だったが、勝負の前に勝負が決まっているとはまさにこのことだ。最小限の科目数しか受験しなかったこともあり、当然他の大学にシフトすることも叶わない。かくして、僕の大学受験は事実上この瞬間に終わりを告げた。

考えてみれば、初めての挫折だった。高校受験は、言ってみれば大成功だった。第一志望の高校にはとんでもない高倍率の前期選抜で合格し、自分には力があるのかもしれないと思った。なんとかなった。いや、なんとかなってしまったのだ。

人並みに高校生活を満喫し、気づいたら高3になっていた。そして受験生になった。「塾や予備校には行かずに現役合格を勝ち取ろう」という地方の公立トップ高校にありがちなスローガンを信じ、まがりなりに自分で勉強してきた。したつもりだった。先生に質問に行き、添削をしてもらい、学校の図書室で自習をして帰る。受験勉強は辛いけど、お互い時間がない中でも励ましながら頑張っていて、春には二人に良い知らせが…。受験生らしい時間を過ごしていたはずだ。

大学受験、いやセンター試験は、そんな僕の理想の受験生像を悉く壊していった。これが現実だ。できるものが上に行き、できないものは上には行けず指を啜って見上げるばかり。クロスロードのような夢物語は二次元の世界でしか起きない空想なのだ、と。僕はまざまざと見せつけられた。挫折だった。僕は受験生の「フリ」をしていただけだった。「なんとかなる」という魔法の言葉は、大学受験ではなんともならなかった。



なんともならないと分かって、これからどうすれば、と考えを巡らせた。私立大学の受験は3校。ダメ元で国立は受験するので二次試験用の勉強もしないといけませんが、私立の過去問もやらないと…。A大学は安全、B大学は相応、C大学は挑戦、いや記念受験といったような受験スケジュール。こんな感覚で良いのか自分



分は…とにかく私立でなんとかしないと！幸いにも親からは私立でも良いと許可はもらっていたので、実質私立の合格云々で僕の進路は決まることになった。A大学は合格。さすがにこれは手応えがあった。自分の高校では受験者はいても進学者はほとんどいない大学だった。次はB大学。第2希望だったので、2学部受験することになっていた。どちらかに引っかかってくれれば…。

そして引っかからなかった。相応とはいいたいなんだったのか。辞書と模試の認定を恨んだ。最後に残ったC大学。こんな崖っぷちの状況にも関わらず、自分の中にある思いがあった。

「この大学あんまり行きたくないんだよな」

人数はやたら多いし、酒飲んでギャーギャー騒いでいる学生しかいなさそうだし、名前だけのブランドを振りかざして偉そうだし…自分の中で妙な悪評が蔓延っていた。じゃあなんで受けるのか？みんな受けているし、まあ1つくらい受けるか、みたいな。しかもこの大学だけ、他の大学ではまったく受けなかった学部を受験することに。自分が唯一得意としていた日本史が勉強できそうな学部と学科の名前をしていたから。今思うと、僕は学部選びでさえグラグラな状態で受験をしていた。これで現在は塾に勤めていて受験の相談をされる立場にいるのだから笑い話である。反面教師。とりあえず受けに行こう。最寄りの駅はどこだっけ。

桜は好きだが、春という季節は自分にとって憂鬱だ。元々鼻炎のアレルギーを持っている身にとって、戦後これでもかというほどに植えられた杉の木たちが受粉のために生き生きする冬の終わりから春にかけてのこの時期は、憂鬱以外の何物でもない。誕生日は4月だが、4月生まれは往々にして損だという持論を持っている。4月生まれの人にこの話をするとだいたい賛同を得られるので、僕の持論はあながち間違っていないのかもしれない。そして何より憂鬱の種なのが、新しい生活が始まることである。新学期、新社会人、新入生、新生活応援セール…4月は何かと「ここから新しく始まる」という風潮が社会にある。学校と会社が4月を始まりと位置付けているのだから、それは仕方のないことだろう。新しく始まるということは、新しく作らなければならないということでもある。「新しい出会いに色めき立つ春、きっと運命の出会いが私を待っている」この言葉の裏には「また一から人間関係を築かなければならない」が隠されている。ずいぶん穿った考え方を持った18歳だった。まだ18歳だったはず、こう思っていた頃は。



気がつく、僕の手には無数の紙が置かれていた。何十枚あるのだ。もらったのではない、渡されたのではない、置かれたのだ。明確な違いがある。自分の意思はなく、相手からの強制によってこの紙たちは僕の手の上に存在する。入学式の頃はサークルによる新入生勧誘活動が盛んだ。さすがマンモス大学。参加しているサークルの数は計り知れない。一説ではサークルだけで何千とあるとか。自分も来年はこの勧誘活動をする側になるのかと思うとゾツとした。この資源の無駄使いはどうにかならないものかとボヤくくらいに僕は疲れ果て、誰もいないベンチにやれやれと腰を下ろした。別に僕はサークル活動断固拒否という人間ではない。勧誘されなくても、もう入りたいサークルは決まっていた。高校の時に打ち込んだものをそのまま続けたいと考えていたから。それは僕が生まれて初めて、自分でやってみたいと主張して足を踏み入れた世界だった。親からでも兄弟からでも先生からでもなく、自分で扉を開けた世界。僕の誇示するアイデンティティだった。

僕はC大学に合格した。正直、まさか、だった。偏差値的に見ればA大学とB大学よりは遥かに上、最難関大学だった。学年主任の英語の先生からは「荒井くん、C大学受かったんだってね！よく受かったね！」と言われる始末。先生も疲れていたからつい本音が喜びとともに出たのだろう。今となれば気持ちは分からなくもないが、多分この言葉は一生忘れない。確かに英語は壊滅的にできなかった。しかしこの年は「たまたま」英語が相当難化したらしく、英語の点数に差がつかなかったのではないかと、大手予備校が分析していた。得意の日本史は「たまたま」自分が最も興味のある戦後史が大問1題分出題され、kkrと思いながらペンを走らせた。国語は可もなく不可もなく。そしてこの結果だった。仕事から帰ってきた母に合格を告げた時、彼女はへたへたと力が抜けたようでそこに座り込んだ。「良かったあ！」あれは祝福というよりも安堵に近かった。行きたいところに行けて良いとは話していたものの、A大学とC大学では知名度や社会的地位は雲泥の差だ。世間体と言われる日本独自の文化は僕にも身につけてしまっている。母の気持ちはなんとなく分かった。分かりたくない気持ちがある一方で、僕もまた、ほっとしていたことに気づいた。安堵だった。大人になってしまった。

あのセンター試験、そして大学受験からX年が経った。あの頃、僕が将来教育に携わり、高校受験や大学受験をする学生を見守ることになるとは思いもしなかった。大学受験が人生の一つの転機になったのは間違いない。自分が思い描いていた将来だってそれなりにはあった。今の生活は当時思い描いていたものとはまるで違う。だがそれが嫌か？と聞かれたら、Noと答える。「これはこれで楽しい」という答えがしっくりくる。自分なりには人生を謳歌しているつもりだ。大学受験の苦い記憶はいまでも鮮明に覚えている。これからどうすれば良いのかひたすら悩んだ。自分の理想、希望ではない道を歩いた。しかたなく歩いた。するとどうだろう、思いの外楽しかった。住めば都という諺、僕はけっこう信じている。C大学での4年間はかけがえのないものになった。「この大学あんまり行きたくないんだよな」と言っていた人間はいったいどこに行ったのだか。しかし1つだけ心残りがある。アイデンティティの消失だ。仕事の関係上どうしても続けることができなくなり、今に至る。歌は、音楽は、合唱は僕の青春だった。高校でも大学でも歌い続けた。大学のサークルでは歌い手ではなく、音楽を作る役職にも就いた。単位を取りつつ、バイトをしつつ、教習所に通いつつ、歌い手たちの声を、そして音楽を作り上げる役職に没頭した。たくさんの人の助けを借りながら、1年間必死に生き抜いた。同じ役職の仲間たちは、いわば戦友だ。卒業した今でも定期的に連絡を取り合い、会っては昔話に花を咲かせている。

家に帰ってきた時は必ずインターホンを押す。こんな習慣は僕になかった。生まれてこの方ほとんど押したことがない。しかし今は押さないわけにいかない。自分の鍵でドアを開けたとしても、チェーンロックが僕の行く手をふさいでいるからだ。家に着く時間まで逐一連絡しているのだからそこまで警戒しなくても…まあ防犯は大事、ということだ。人の常識は育った環境で変わるものだ。その家の常識が自分の常識としてインプット



され、人はその状態で社会に飛び出すことになる。常識の違う人同士がひとつ屋根の下で暮らすというのは想像以上に大変で面倒で、そして興味深いものである。ふうやれやれと半ば諦め気味に今日も僕はインターホンを押す。鍵の解錠音とチェーンロックを外す音が聞こえる。防犯のためとはいえここまで面倒な作業を毎回するのは、大変ではないのかね。「鍵だけだとあなただけで開けられる。でもチェーンロックは私がいないと開けられない。開けに行くために、私も玄関に行かなければならない。それだけ。」不思議なこだわりを持った妻である。その妻は、大学時代の戦友の一人だ。他大学の合唱団に所属していたその人は、僕と同じ音楽を作り上げる立場にいた。出会った頃も、まさか同じ家に住むことになるとは思ってなかった。縁、とはそういうものなのか。たくさんの人から祝福をいただきました。感謝申し上げます。

スケジュール

月	日	曜	受付時間	授業・テスト・模試など				保護者会・研究会など		
2	1	土	9 ~ 22						6Vコース授業報告会 10:00~11:30	
	2	日	9 ~ 20		中1・中2 2月度①	2V 1月度 月例テスト	1V 1月度 月例テスト			
	3	月	14 ~ 22							
	4	火	14 ~ 22							
	5	水	14 ~ 22							
	6	木		休室						
	7	金	14 ~ 22	3年生のみ 2月度②						
	8	土	9 ~ 22						新中1対象「Z会進学教室からの難関高校受験」 10:00~11:00	
	9	日	9 ~ 20		中1・中2 2月度②					
	10	月	14 ~ 22							
	11	火	9 ~ 22					10:00~12:00 2K 保護者会	14:00~16:00 1V 保護者会	
	12	水	14 ~ 22		千葉県立高校入試(前期)					
	13	木		休室	千葉県立高校入試(前期)	国立大附属高校入試				
	14	金	14 ~ 22	3年生のみ 2月度③						
	15	土	9 ~ 22							
	16	日	9 ~ 20		中1・中2 2月度③				全学年対象「高校入試研究会(東京都入門編)」 10:00~12:00	
	17	月	14 ~ 22							
	18	火	14 ~ 22							
	19	水	14 ~ 22							
	20	木		休室						
	21	金	14 ~ 22		東京都立高校入試(一般)					
	22	土	12 ~ 22							
	23	日	9 ~ 20	休講日	2V 2月度 実力テスト	2K 2月度 実力テスト	1V 2月度 実力テスト	11:00~12:00 春期・本科説明会		
	24	月	14 ~ 22	休講日						
	25	火	14 ~ 22	休講日						
	26	水	14 ~ 22	休講日						
	27	木		休室						
	28	金	14 ~ 22	休講日						
	29	土	10 ~ 22	休講日					新中1対象「Z会進学教室からの難関高校受験」 11:00~12:00	
3	1	日	9 ~ 20	新中2・中3年生 3月度①				11:00~12:00 春期・本科説明会		

Z会の教室
Z会進学教室 葛西教室

〒134-0084 江戸川区東葛西 6-2-3 第三須三ビル 6階 TEL03-5878-0844

受付時間 平日 14:00~22:00 日曜日・講習中 10:00~20:00

『葛西通信』の記事(バックナンバー)はWebからもご覧いただけます。

Z会 葛西 検索